

平成 22 年 5 月 21 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19720002

研究課題名（和文） カント『純粹理性批判』超越論的弁証論の研究

研究課題名（英文） Studies on the Transcendental Dialectic of Kant's *Critique of Pure Reason*

研究代表者

城戸 淳 (KIDO ATSUSHI)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号： 90323948

研究成果の概要（和文）：

本研究は、イマヌエル・カント『純粹理性批判』（1781/87年）の「超越論的弁証論」に関する総合的研究である。弁証論に現われる3つの特殊形而上学（心理学・宇宙論・神学）に対するカントの批判的議論の哲学的内実を分析することで、観念論論駁、自由論、存在の根拠の問題などに関するカントの哲学的思索に迫ることができた。またこれによって、弁証論全体をつらぬくカントの理性批判あるいは仮象批判の方法論の一端を明らかにしえた。

研究成果の概要（英文）：

I studied Kant's Transcendental Dialectic in his *Critique of Pure Reason* (1781/87). I gave philosophical analyses of Kant's critical arguments against rational Psychology, Cosmology and Theology. These analyses brought me approaches to Kantian philosophical themes, i.e. the refutation of idealism, the problem of free will and the question of the ultimate ground of existence. On the basis of such studies I showed also Kant's methodological strategy of the critique of dialectical reason in his whole Dialectic.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	330,000	2,230,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 ・ 哲学・倫理学

キーワード：カント, 『純粹理性批判』, 弁証論, アンチノミー, 二律背反, 誤謬推理, 理想論, 仮象批判, 理性批判

1. 研究開始当初の背景

19世紀の新カント派以来の『純粹理性批判』研究は、その前半部分(感性論と分析論)に集中しており、「批判」の本来の課題である超越論的弁証論についてはながらく等閑視されてきた。かつてハイムゼートはその偏った研究状況を指弾し、超越論的弁証論に関する浩瀚なコメンタリーを著したが、しかし弁証論の研究が手薄な状況は相変わらずであり、カントの「批判」哲学の十分な理解のためには、弁証論の歴史的・体系的な研究のいっそうの拡充が待たれるところであった。

そのような状況に鑑み、わたしは以前から『純粹理性批判』のなかでも、とりわけ弁証論の諸テーマに関して研究を続けてきた。弁証論は伝統的な3つの特殊形而上学を批判するものであり、(1)心理学を扱う誤謬推理論、(2)宇宙論を扱うアンチノミー(二律背反)論、(3)神学を扱う理想論、の3つのテーマから成る。

(1) 誤謬推理論に関しては、本研究以前の数年間にわたって、拙論「カントにおける自己意識の問題——超越論的主観と統覚の総合的統一」(新潟大学人文学部『人文科学研究』第110輯、2002年)、「カントの Cogito ergo sum 解釈——カントにおける自己意識の問題(2)」(新潟大学人文学部『人文科学研究』第116輯、2005年)、「誤謬推理論における理性批判と自己意識」(カント研究会/檜垣良成・御子柴善之編『現代カント研究 10 理性への問い』晃洋書房、2007年)などで、集中的に考察を進めてきた。

また(2)アンチノミー論に関しては、それ以前から、拙論「流れ去った無限と世界の起源——カントの第一アンチノミーについて」(東北大学哲学研究会編『思索』第31号、1998年)、「カントにおける「窃取」概念の変容——アンチノミー解決への形成過程」(日本哲学会編『哲学』第51号、2000年)、「カントと無限の問題」(日本カント協会編『日本カント研究 2 カントと日本文化』理想社、2001年)などで論じてきたところである。

(3) 理想論については存在論的な観点からの解明を目指して研究に着手したところであった。

ところで、このような(3)理想論の研究過程において、弁証論の個々のテーマ(心理学、宇宙論、神学)に限定した研究だけではなく、それと並行して、弁証論全体を貫く方法論的なモチーフを明らかにする研究が必要であると考えるにいたった。すなわち、個々の特殊形而上学への批判やそこにこめられた哲学的洞察を解明することはもちろん重要であるが、それらを踏まえただけで、3つの形而上学批判に通底し、それらを支配

しているカント的な「理性批判」の方法論的理念を明らかにし、それによって超越論的弁証論という、『純粹理性批判』本来の課題の哲学的意味を示すことが必要である、ということに想到したのである。このような研究は内外を見渡しても、まったく手薄であって、新たな研究の待たれる領域であった。

いうまでもなく弁証論は「仮象の論理学」であって、仮象批判をその面目とする。その仮象批判の方法論については、かつてわたしは「窃取(subreptio)」という論理学用語の習得と変容に即して検討したことがあるが(拙論「カントにおける「窃取」概念の変容——アンチノミー解決への形成過程」(前掲)、「現象と空間——カント超越論的感性論における窃取モデルの論理」(新潟大学人文学部『人文科学研究』第107輯、2001年)など)、本研究ではそれをさらに発展・拡充させることになった。

これによって、誤謬推理論で検討される「超越論的統覚」の概念、第四誤謬推理からアンチノミー論において登場する「超越論的観念論」、理想論での「存在」に関するテーゼ、そして「付録」における理性の「統制的使用」などを統一的な視野のもとにおさめる、弁証論でのカントの理性批判の構想を明らかにする視座が得られた。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえて、本研究は、超越論的弁証論におけるその3つの特殊形而上学批判のテーマ(心理学を批判する誤謬推理論、宇宙論を批判するアンチノミー論、神学を批判する理想論)の諸問題を解明する個別的な研究と、弁証論全体にわたる理性批判の方法論の本質に関する研究との、二本柱で進められた。個々の形而上学批判の内実を徹底的に解明することを通じて、弁証論全体を領導する批判的理念を明らかにすることを目指すものである。

研究目的としては、すでに述べたように、『純粹理性批判』のなかでも弁証論の研究はこれまで比較的手薄であった。本邦でも自我論や法廷モデルといった個々のテーマはともかく、弁証論全体を射程に入れた研究は、高橋昭二『カントの弁証論』(創文社、1969年)などが例外的に挙げられる程度であり、とりわけ個々のテーマについての発展史的・理論的な分析に裏付けられたものとなると皆無に等しい現状である(これは欧米圏の研究を見ても同様)。本研究は、カント研究のこのような空隙を補うことを目論むものである。

また、弁証論全体を射程に入れたこのような研究によってはじめて、形而上学批判から一転して進められる、感性論・分析論におけ

る批判的形而上学の構築の積極的意味も明らかになるであろう。これまで集中的に検討されてきた分析論の議論に、新たな角度からの光を当てることもまた、この研究の目的の1つである。

さらに、広い意味での思想的・哲学的意義について言うなら、カントの弁証論は、理性の全体論的思考、すなわちわれわれの知識と存在を絶対者の認識のほうから基礎づけるような思考の可能性を問うものである。このような理性の全体性の可能性と不可能性は、今日のわれわれの思想的状況においても、喫緊の課題であり続けているように思われる。たとえばレヴィナスが他者の理解あるいは包摂 (comprendre) について語るとき、そこで問われているのはやはり絶対者の認識をめぐるカント的な弁証論の問題意識である。知識や存在を絶対者のほうから基礎づけるという (いわば神学的な) 思考方法の可能性と不可能性を徹底的に調べあげたカントの思考から、このような現代の思想状況を照らしだすとき、われわれはあらためて今日的なトピックをその哲学史的な深さにおいて理解することができるだろう。

さらに言うなら、自己同一性や自己意識の問題、行為と自由意志の問題、知識の基礎づけの問題などの現代哲学的な諸問題においても、周知のように、カント哲学が随所で決定的な参照項になっているのが見受けられる。だが、分析論で開陳されるカントの積極的な哲学は、弁証論での否定的な思考を抜きにしてはまったく理解できないのである。たとえばしばしばカントの超越論的演繹論はある種の知識の基礎づけの試みとして解釈されるが、しかしそのような基礎づけの積極的な意味は、物自体としての第一原因からの推論 (基礎づけ) を禁じ、超越論的観念論を提起するアンチノミー論での否定的議論を背景として考慮に入れなければ、その十分な奥行きにおいて理解することができないだろう。それゆえそのような現代的な問題にカント研究の立場から応答するにさいしても、カントの弁証論を究明する本研究は独自の意義をもつと思われる。

3. 研究の方法

本研究は、弁証論の3つのテーマに関する個別的研究と、弁証論全体に関する研究との、二本柱で進められた。

具体的には、個別の形而上学批判のテーマについては、これまでのわたしの研究を踏まえつつ、その欠けているところを補うかたちで、弁証論全体を解明するのに必要なテーマに関して研究を拡充するという方法をとった。とりわけ(1)誤謬推理論に関しては、第四誤謬推理と観念論論駁のテーマ、(2)アンチノミー論に関しては、自由と行為の問

題 (第三アンチノミー)、(3)理想論に関しては、存在の根拠 (なぜ在るのか?) をめぐる宇宙論的証明の問題である。

また、後者の弁証論全体の形而上学批判の方法論に関する研究は、以上の個別テーマに関する研究に内在しつつ、それと並行するかたちで進められた。

方法論的には、本研究は発展史的な文献研究を重視する。カントの前批判期の著作、さらには遺稿・講義録や、当時の哲学文献などを踏まえて、カントの弁証論的思索の発展を、文献的に裏付ける作業がまずは大前提となる。

特殊諸形而上学とのカントの付き合いは前批判期の若いころから始まっており、またそれらの形而上学を批判する戦略も、アンチノミー論や理想論の場合のように比較的初期に見出され、その後発展させられたものや、誤謬推理論の場合のように1770年代後半になってようやく自覚的に採用されたものまで、さまざまである。それらの個々の発展の錯綜と多様を丹念に文献的に跡づけることによって、はじめてカント批判哲学の哲学的洞察も明らかになるし、また超越論的弁証論という統一体を際立たせることもできるのである。

ただし、現在のカント研究の動向に沿って、主として最近の英米圏の議論を射程に入れることもまた必要となる。誤謬推理に関しては「心の哲学」や実在論/反実在論の問題、第三アンチノミーに関しては行為論や自由意志論、神学に関しても現代形而上学の議論など、英米系の現代哲学との対質は避けられない。このような現代との対話を通じて、カント哲学の現代的な意味を示すことも重要なテーマである。

さらに、『純粹理性批判』以降の展開についても、一定の研究を進める。『実践理性批判』や『判断力批判』での弁証論 (アンチノミー) から、晩年の遺稿 (いわゆる『オープス・ポストゥムム』) にいたるまで、弁証論での諸テーマについてカントは執拗な挑戦を続けている。晩年の自我論、観念論論駁、神の存在証明などはよく知られているところであるが、これらの晩年の議論と『純粹理性批判』の弁証論での議論とを比較検討することは、批判哲学の解明のための絶好の試金石である。フェルスターの研究などの最近の研究状況をにらみつつ、『オープス・ポストゥムム』と『純粹理性批判』との比較検討という方法論も試みられた。

研究費の多くは、当時の哲学文献のリプリント (Olms 社など) や関連文献に費やされた。全国的にも18世紀ドイツ哲学の文献資料は、今後ともいっそうの充実が待たれる領域である。

4. 研究成果

本研究は、『純粹理性批判』の「超越論的弁証論」に関して、その3つの特殊形而上学のテーマ（心理学を批判する誤謬推理論、宇宙論を批判するアンチノミー論、神学を批判する理想論）の諸問題を解明するとともに、弁証論全体の方法論的本質を明らかにすることを旨としたものである。

第1の合理的心理学の誤謬推理に関しては、とりわけ第四誤謬推理（＝観念論批判）に関連して、「哲学——観念論とはなんだったのか？」（『人文学の生まれるところ』所収）において、カントの観念論と観念論批判の意味について、原理的な観点から論及を試み、問題の輪郭を与えることができた。また、訳と解題を発表した「ゲッティンゲン書評」は、『純粹理性批判』を「観念論」だと批判して、カントをして第四誤謬推理の全面改訂と、第二版における「観念論論駁」の執筆へと駆り立てたものであり、誤謬推理論の研究の基礎資料となるものである。「カントの空間論・序説——身体・開闢・感情」（『形と空間のなかの私』所収）なども足掛かりにして、今後とも、文献的な裏付けを拡充しつつ、観念論の問題にさらに迫りたいと思う。この研究テーマは22年度からの科研費「近代哲学史のなかのカント理論哲学——対話的哲学史の試み」でも継続し、デカルト対カントという観点から研究成果として論文にまとめる予定である。

第2の宇宙論のアンチノミー論に関しては、まず、その第三アンチノミーにおける「自由」の問題について、「理性と普遍性——カントにおける道徳の根拠をめぐって」（『岩波講座 哲学 06 モラル／行為の哲学』所収）において、その行為論的な射程を示し、倫理的含意を解明することによって、その思想構造に関して一定の見通しをつけ、また合わせて、アンチノミー論で焦点となる「根拠」をめぐるカント哲学的思考様式にも触れたところである。

第3の神学の理想論については、とくに宇宙論的証明に対する批判に焦点をあわせて解明を試み、論文「神の現存在の宇宙論的証明に対するカントの批判について」として発表した。これはカントの宇宙論的証明批判を、第四アンチノミーなどとも関わる弁証論の文脈に置き入れて理解し、弁証論的理性に対する批判として読み解いたものである。この論文によって、このような理性批判をとおして存在論的なユートピアを解体し、分析論における新たな様相論へと展開していく批判哲学の軌跡を、描きだすことができた。カントの弁証論の方法論的意義に関しても、この研究を核として一定の見通しが開かれたところである。

弁証論の理性批判の方法論的本質に関す

る研究は、個別テーマに関する以上の諸研究において個別的には解明が進められたが、ザンながらいまだまとまった成果をあげるに至っていない。

ただし、弁証論研究の射程を『実践理性批判』の弁証論にまでひろげ、実践理性における徳と幸福のアンチノミーを考察し、その成果をカント協会でのシンポジウムで「カントにおける幸福のパラドクス——幸福主義批判と最高善とのあいだ」と題して発表した（『日本カント研究 11 カントと幸福論』に掲載）。また同様のテーマを、ライプニッツからカントにいたる18世紀ドイツ哲学史の文脈で考察し、それを「弁証論における幸福のエコノミー——ライプニッツのオプティミズムからカントの最高善へ」として報告した。このような実践理性における弁証論もまた、カントの弁証論を総合的に理解するためには欠かせない観点であり、これも踏まえつつ、『純粹理性批判』の弁証論の解明に進みたい。

今後とも、弁証論研究を続行し、弁証論に関わるこれまでの拙論をとりまとめ、さらにはあらたに数本の論文を発表し、最終的には弁証論に関する単著として刊行する所存である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

①城戸淳「カントにおける幸福のパラドクス——幸福主義批判と最高善とのあいだ」『日本カント研究 11 カントと幸福論』理想社、2010年（近刊）〔査読無（招待講演論文）〕

②城戸淳「弁証論における幸福のエコノミー——ライプニッツのオプティミズムからカントの最高善へ」、科研費報告書『エコノミー概念の倫理思想史的研究 研究成果報告書・補足論集』2010年、44～56頁（近刊）〔査読無〕

③城戸淳「神の現存在の宇宙論的証明に対するカントの批判について」新潟大学人文学部『人文科学研究』第125輯、2009年9月、1～31頁。〔査読無〕
http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/bitstream/10191/9672/1/125_1-31.pdf

④城戸淳訳・解題「ゲッティンゲン書評（ガルヴェ／フェーダーによるカント『純粹理性批判』の書評）」『世界の視点 知のトポス』第3号、2008年3月、1～14頁。〔査読無〕
http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/bitstream/10191/6563/1/3_1-14.pdf

〔学会発表〕(計3件)

①城戸淳「弁論における幸福のエコノミー——ライブニッツのオプティミズムからカントの最高善へ」、第62回 哲学/倫理学セミナー、2009年12月19日

②城戸淳「カントにおける幸福のパラドクス——幸福主義批判と最高善とのあいだ」、日本カント協会、第34回学会、2009年11月21日、立正大学

③城戸淳「神の現存在の宇宙論的証明に対するカントの批判について」、カント研究会、2008年11月30日、法政大学

〔図書〕(計3件)

①共著『人文学の生まれるところ』(総頁数359頁)、栗原隆編、東北大学出版会、2009年3月、このうち、城戸淳「哲学——観念論とはなんだったのか?」(31~49頁)を執筆。

②共著『岩波講座 哲学 06 モラル/行為の哲学』(熊野純彦編)、岩波書店、2008年11月、このうち、城戸淳「理性と普遍性——カントにおける道徳の根拠をめぐって」(57~75頁)を執筆。

③共著『形と空間のなかの私』(総頁数335頁)、栗原隆編、東北大学出版会、2008年4月、このうち、城戸淳「カントの空間論・序説——身体・開闢・感情」(55~78頁)を執筆。

〔その他〕

大学でのブログ(人間学ブログ)の下記アドレスにて研究成果を踏まえた講演の記録を掲載している。

http://www.human.niigata-u.ac.jp/mt/ninge/n/2010/03/post_53.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

城戸 淳 (新潟大学 人文社会・教育科学系 准教授)

研究者番号: 90323948

(2) 研究分担者 なし

()

研究者番号:

(3) 連携研究者 なし

()

研究者番号: